

# 地域福祉活動における地域拠点形成の実態と課題に関する研究

## —福岡市東区の「はこぎきカフェ」の事例から—

キーワード：コミュニティカフェ，地域福祉活動，居場所，社会福祉協議会，地域連携

所 属 人間共生システム専攻

氏 名 李<sup>リ</sup> 妮<sup>ニ</sup> 洳<sup>ユ</sup>

### 1 問題と目的方法

日本における少子高齢化の進展とともに、総人口が減少している一方で、年齢層からみると、高齢者人口は大きな割合を占め、さらに増加する傾向にある。高齢社会に直面するなか、現状の問題を解決しつつ、高齢社会に対応する社会モデルを考える必要があると考える。

現代社会における家族モデルは核家族であって、結婚した子供と一緒に住んでいる高齢者は少なくなっている。このような高齢者にとって、近隣住民との付き合いは常に重要な役割を果たしている。だが実際の状況によると、高齢者の近隣住民との交流は年々減少していることがわかる。

さらに、地域貢献はしたいが何をどうしたらよいか分からないという声もあり、これらを地域の力として活かしていくことができるように、行政や社会福祉協議会なども含めて検討されてきた。地域住民から、自治会、地域の企業または病院などまで、多様な主体の参加を促し、地域における支え合いの体制づくりを進めていくことが重要であると見なされている。

以上のような日本社会の状況を背景として、各種の地域福祉活動からコミュニティカフェを取り上げることで、地域福祉活動の状況を把握したうえで、地域住民の意識を考察する。また、コミュニティカフェといった新たな取り組みがなぜ必要となってきたのかも明らかにしたい。

地域にいるコミュニティカフェである。コミュニティカフェの特徴とはカフェをめぐって公的機関・企業からはじめ、地域に住む医療・福祉の専門職や事業所、民生委員及び地域ボランティアまで、さまざまなサポーターが地域的な意識を共有して地域支援をしていくようになっている。

多様な福祉課題を抱えている地域にあたって、「地域倶楽部カフェ」のような「コミュニティカフェ」を通して、住民を含めた地域連携を作っていくのは重要ではないか

と考えている。また、「地域共生社会」というのも地域におけるすべての住民から企業、行政までお互いに尊重し、助け合えながら暮していくような社会を目指していると思っている。だが、現実の「コミュニティカフェ」は期待されているようにうまく機能しているか？住民の「居場所」ほしいという単純な思いから出来上がったコミュニティカフェはこのようなたくさん機能を付けられたことになったことは住民にとって本当に望まれているか。また、各地域の環境により、「コミュニティカフェ」はどのように生まれて、地域にどのような機能をしているかについては考察すべきだと考えている。

行政側から見ると、「コミュニティカフェ」は行政が地域の多様な課題を解決するため、地域連携を求める手段として進められているが、住民にとって、単に地域での「居場所」を欲しいという願いで「コミュニティカフェ」を支持している。行政と住民とも「コミュニティカフェ」に、その間に微妙な違いがあると見えてきた。実際に「コミュニティカフェ」はどのようにこの両者の期待を応えているか、また行政と住民の関係をどのように処理している、あるいは調和しているか？これらの質問を答えるには、「コミュニティカフェ」の実際の状況を見ないと解決できない。

### 2 方法

本研究の調査方法は主に参与観察とインタビューである。補助として、はこぎきカフェの来場者にアンケート調査を行った。筆者は2017年12月15日より、福岡市東区社会福祉協議会に聞き取り調査をし、その後、はこぎきカフェにめぐって、参与観察4回、公民館の事業見学2回、また、ボランティアとして入っている自治協議会やボランティアの会の人たちに対する聞き取り調査計6回行った。

本論文は分析の際に、以下の三つの点から入っていく。一つ目は、はこぎきカフェにおいて、担い手である各組

織がどのような機能を持ち、どのように連携しているかという点である。特に、はこぎきカフェボランティアの会と東区社会福祉協議会を中心に研究を進めていく。この二つの組織は地域カフェの運営にあたって、重要な役割を果たしている。これらの組織は互いに重なる部分(人員配置や役割など)も多く、どのような経緯で発足したのか、どのような機能を果たしているのかという点や、社会福祉協議会との関係についても調査を行う。

二つ目は、はこぎきカフェに参加している住民はどのようにカフェを知り、参加するようになったのか、またどのようなことをカフェに求めているのかという点である。住民にとってはこぎきカフェはどのような意味を持っているのか考察していく。

三つ目は、はこぎきカフェの持つ地域での機能や、住民からの期待に関する点で、これらについても分析を行う必要がある。

### 3 結果

#### 3.1 はこぎきカフェの取り組み

はこぎきカフェは「はこぎきカフェボランティアの会」が主催者となり、箱崎公民館を会場として借り、社会福祉協議会や自治協議会などと協力しながら実施している。開催日時は毎月 29 日 11 時～15 時までの 4 時間である。

はこぎきカフェの運営者として直接関わっているのは「はこぎきカフェボランティアの会」という組織である。東区社会福祉協議会の会長がはこぎきカフェボランティアの会の会長として就任し、箱崎校区自治協議会のメンバーがボランティアとして積極的に加わり、カフェを運営している。そのほか福岡市保健福祉課、東区社会福祉協議会の箱崎校区担当者がコミュニティソーシャルワーカーとしてはこぎきカフェに携わっている。箱崎公民館はカフェに場所を提供しているため、カフェの状況を見ながら地域のニーズも把握できる。

箱崎校区自治協議会のメンバーは町内での役割を持つ存在であると同時に、地域に住んでいる住民でもある。ボランティアとしての面と地域住民としての面の両方を持ち合わせているメンバーから声を聴くことで、住民のニーズがさらに発見できると考えられる。

調査からみると、各組織の代表者として「仕方なく」はこぎきカフェの設立や運営に携わるようになった、という気持ちもある一方で、はこぎきカフェは地域にとって必要なものであり、自身の役割の重要性も感じている。具体的に地域の居場所づくりから地域連携まで、はこぎきカフェには様々な可能性が見える。

#### 3.2 はこぎきカフェの機能

はこぎきカフェの効果を測るために、アンケート調査では「はこぎきカフェのどこが良いと思いますか」という質問を用意した。調査結果から、はこぎきカフェは確かに効果を持っていることがわかる。特に「出入りが自由で、自由に過ごせる」というように居場所づくりとしての役割は確実に達成できた。

アンケートの回答項目である「出入りが自由で、自由に過ごせる」(76.3%)、「一人で来ても楽しい」(18.4%)、「リラックスできる」(31.6%)、「居場所ができた」(10.5%)、「安心できる場所である」(31.6%) はまとめて「居場所づくり」と分類できる。「様々な人と出会える」(63.2%)、「生きがいのようになった」(5.3%)、「地域活動に参加するようになった」(15.8%)、「何かできることがあれば手伝いたいという気持ちになる」(23.7%) はまとめて「地域拠点」と分類できる。

「世代間の交流ができる」(31.6%) は、世代を超えた交流が行われていることを示している。

「地域の情報を得やすくなった」(34.2%)、「病院や薬局などとの関係が強くなった」(2.6%)、「その他」(5.3%) はまとめて「地域の社会資源との連携」と分類できる。

アンケート調査の結果から、はこぎきカフェは確かに重要な機能を果たしていることが分かる。

##### ①居場所づくり

まず、「地縁」のつながりを求める人々にとって、コミュニティカフェは、「地縁」の輪を広げてくのに効果的な手段である。さらに、利用者が「居たいように居られる」自由な空間の中で居合わせることによって、自分の存在が受容されていると感じられる。はこぎきカフェのような自由な空間では、元からの知り合いであろうとなかろうと、新たな出会いが自然と生まれる。生活の輪やネットワークが広がっていくための重要な役割を果たしている。そのような多様なネットワークが地域空間の中で交差して、それまでになかったような創発的なアイデアやつながりを生み出している。

##### ②世代を超えた交流

次に、はこぎきカフェを通じて利用者同士で絆を深めてもらうために、子どもと高齢者の交流を促したり、子育て中の母親の交流も促したりしている。それにより世代を超えた交流が生まれると同時に、高齢者も孤独を感じにくくなっている。

##### ③校区の地域拠点

さらに、コミュニティカフェの特徴の一つに、人々のネットワークが広がっていく点がある。それまで顔見知

りでなかった者同士がつながり、互いに助け合う関係性になれば、住み慣れたまちで安心して暮らし続けることができる。参加者だけではなくボランティアにとっても重要な拠点となる。

#### ④地域連携

地域の医療機関が在宅医療を勧めるためにカフェに参加し、参加者に医療サービスを提供している。地域の社会団体にとっても、カフェを通して自分の知名度を拡大すると同時に、社会貢献もでき地域とのつながりを強くするきっかけとなった。また、ここにはカフェにとってのメリットもある。カフェのチラシを病院や薬局など高齢者がよく行くところに置いてもらうことで、カフェの認知度も高めている。

コミュニティカフェで人と人が出会い繋がることで、住民の主体的な活動を生み出し、その活動を通じてさらに人と人が繋がるという循環が出来上がる。これが社会関係資本の蓄積となり、地域社会での助け合いや課題解決力の向上につながっていく。

はごきカフェは完璧でない部分もあるが、必要なものであると認識している。箱崎公民館やデイサービスの場所を借りて地域住民の居場所を作るよりも、より住民にとって便利で身近な場所を使って、住民自身に活躍させるのはよいのではないかと考えた。しかし住民にも住民の考えがあり、現在のはごきカフェが発展し、そこから新しいつながりが生み出されることを目指して、現在の活動に取り組んでいる。

## 4 考察

### 4.1 はごきカフェの特徴

はごきカフェの立ち上げから現在に運営に至るまで、地域にある各種団体の協力を必要としている。最初の箱崎公民館でのアンケート調査をはじめ、東区社会福祉協議会の積極的な協力により、様々な団体を取り込み、これらの団体の思惑を調和しながら、今のようなはごきカフェの形を継続している。

はごきカフェは「はごきカフェボランティアの会」という組織が核となって運営している。この会のメンバーは、町内会を含めた自治協の人たちと地域の一般の住民である。町内会の役員の中には初めは役職の一環として仕方なくはごきカフェに参加した者もいたが、最終的にはカフェを好きになったと答える。しかし、ただでさえ町内会や自治協の仕事で時間を取られているのに、はごきカフェの参加によって更に自分の時間が減らされてしまう不満を抱えている。

また地域住民は、はごきカフェで多様な人と出会い

人付き合いが盛んになることを喜ばしく思っている。はごきカフェに来て、ボランティアをしながら、子どもと遊んだり、活動に参加したりできる。ボランティアとして参加することにより、つながりが一層強くなった。

本研究を通じて、利用者であっても組織者であっても、地域にとって重要な存在であることが分かった。「はごきカフェボランティアの会」を通じて、コミュニティカフェの利用者をサービスの受け手としてとらえるのではなく、主催者とともにその場の雰囲気を作り出す存在として位置付けられていることが分かった。また公的な場では、子どもや高齢者など利用者層が決められる場合が多いが、コミュニティカフェは多様な人が集まる場であるというのが特徴が現れた。

続いて、はごきカフェの利用者を見ていきたい。はごきカフェの利用者は大きく分けて高齢者と子育て中の母親である。これらは一番「居場所欲しい」と願う人々である。コミュニティカフェでの交流を通じて、はごきカフェとつながりを作り、互いに協力していくような関係を構築できると考えられる。

最後に、はごきカフェは「顔の見える関係」から「互いを理解し共に活動できる関係」へと発展してきた。各地域団体は互いに協力し合って、カフェの運営や地域のつながりづくりで重要な役割を果たしてきた。特に自治協議会が「はごきカフェボランティアの会」の担い手として、行政と住民の橋渡しとなった。カフェの担い手の1つである自治協議会のメンバーたちは校区の住民でもある。彼らがこの校区を一番知り、校区の住民に一番近い人達である。はごきカフェで利用者と会話しながら、互いに成長してきた。

### 4.2 はごきカフェと地域連携

地域社会の大きな変化とともに福祉の課題が複雑化・多様化している。コミュニティカフェを通して、ここで生まれた地域性を踏まえながら、その先の「地域共生社会」を目指す地域づくりをいかに構築していくかを考えていく。

しかし、はごきカフェにもいくつかの課題がある。まずは、ほかの地域活動と同様に後継者育成の問題がある。実際にはごきカフェのボランティア数は年々増加していて、住民はボランティアとしての参加の意思も高まっている。ボランティアとして入りたい住民がいるならば、はごきカフェの存在意味があるとも言える。

次に、はごきカフェは「居場所欲しい」という要望により生まれたため、地域交流したい高齢者を含め、引きこもりがちな高齢者の参加までが望まれている。現在

カフェに来る人々はお互いに交流できているが、これ以上深いつながりができればと期待している。高齢者同士、高齢者と子ども、高齢者と母親などの交流がもっと盛んになるよう、住民相互の信頼関係の構築が重要であると考える。

コミュニティカフェは社会的に孤立している者の居場所になり得ることから、孤立しがちな人たちが生活する地域に目を向ける必要があり、地域との関係構築が不可欠であると考えられる。利用者であっても組織者であっても、コミュニティカフェは重要な位置付けである。

また住民だけで解決できない課題などを、地域組織や関係機関との連携により協働しながら解決できるようになった。このようにコミュニティカフェの場によって、地域内で支え合う関係性が構築されていく。

以上のことから、コミュニティカフェは現代における地域拠点の一つとして機能していることが明らかになった。コミュニティカフェの利用者は多様であり、年齢や地域に関係なく誰もが利用できる場所ならではの出会いが求められている。こうした場所では、利用者同士あるいは近隣住民を巻き込んだ緩やかなネットワークが形成されており、既存の地域組織にとらわれない地域拠点となることが示唆された。

### 4.3 小括

コミュニティカフェは住民や当事者の声からスタートし、住民を中心に話し合いを重ね、地域の各団体がそれぞれの特徴を生かしながら取り組んでいる。その過程において、コミュニティワーカーや自治協が仲介役となっているのも特徴である。さらに「わが事」の地域づくりにもつながっている。

多機関協働による包括的支援体制が構築できるように、身近なコミュニティカフェを利用して住民のニーズを把握し、地域づくりと一体的に進めることが重要である。分野別の専門職はもちろん、行政内の連携を含めた相談体制を充実させていくことが最終的に地域づくりにつながっていくだろう。

しかし地域の多様な主体が持つそれぞれの問題意識や強みは異なる。それぞれをもとに地域活動の拠点づくりに取り組むことによって、その地域独自の「だれもが自分らしく暮らしていける居場所」を実現できる。

住民は地域で起きている全てのことを「我が事」にはできない。そこでコミュニティカフェのような多様な地域活動拠点を作り、地域の中の課題を「我が事」として考えるきっかけをつくる。それまで地域の中でつながりを持たなかった住民がつながりを持つ機会を獲得すれ

ば、地域の課題を共有でき、解決に向けた取り組みが生まれる可能性は高まる。また地域には多様な人々が集まるからこそ、住民は地域にある課題に気付くことが可能となり、一つ一つが私たちの課題と認識され解決への取り組みが期待できる。

この地域活動拠点において地域住民がより力を発揮していくためには、住民と住民の横の関係が必要になる。そこに集まる人たちが、運営する人・利用する人であっても、「やってあげる人」・「やってもらう人」という関係ではなく、全員がはごきカフェを居場所として捉え、支え合う関係性が理想的だ。ともにコミュニティカフェの継続や発展、地域課題の解決に資源や力を出し合う存在であると認識できれば、その居場所を共有する者として横につながるができる。このような住民が横につながり合う地域活動拠点を核に、より多くの地域住民が「我が事」として地域の課題を共有するように働きかけ、解決に向けて地域を変えようとする人たちを組織化する草の根活動が始まるのである。

## 5 主要引用文献

- 陣内雄次・萩野夏子・田村大作, 2007, 『コミュニティ・カフェと市民育ち——あなたにもできる地域の縁側づくり』 萌文社.
- 久田邦明, 2010, 『生涯学習論——大人のための教育入門』 現代書館.
- 倉持香苗, 2010, 「地域の居場所づくりにおけるネットワーク構築の可能性——大分県別府市におけるコミュニティカフェ実践から」『コミュニティソーシャルワーク』 6:54-59.
- , 2014, 『コミュニティカフェと地域社会——支え合う関係を構築するソーラー実践』 明石書店.
- 牧野丹奈子, 2011, 「『人』を大切にするとコミュニティビジネス—成長した個人が生み出す社会性と事業性」『桃山学院大学経済経営論集』 52 (1) :123-209.
- 牧里常治, 2009, 「社会福祉実践を支える資源開発の方法——プラン策定からプログラム (プロジェクト) 開発, そしてサービス開発へ」『社会福祉研究』 105:66-74.
- 村社卓, 2018, 「高齢者の孤立予防を目的としたコミュニティカフェに参加する住民ボランティアの継続特性—ボランティアの「楽しさ」に焦点を当てた定性的データ分析」『社会福祉学』 58(4):32-45.